

# 高校における「ジェンダー・バイアス」に関する 社会学的研究

—大学生が語る高校時代の体験の分析から—

XU Yingrui

本稿は、日本の高校内部におけるジェンダー問題に焦点を当て、元高校生である大学生を対象としたインタビュー調査を通じて、高校在学中に経験したジェンダー・バイアスに対する当事者の解釈や意味づけ、および「日常的抵抗」の実践を明らかにする。これにより、構造と行為主体のダイナミックな相互作用における「個人内プロセス」を社会学的視点から研究するものである。

序章では、本稿の背景と問題意識を提示した。日本では男女の高等教育進学率の差はほぼ解消されたが、実態として専修学校・短期大学への進学は女子に偏り、大学進学率は男子が高い。大学内部でも文系学部には女子、理系学部には男子が集中するジェンダー分離が顕著である。それにもかかわらず、教育現場や社会には「学校ではジェンダー平等がすでに達成された」という認識が広く共有されている。本稿では、高等教育への移行期にあたり、性別分化が拡大する高等学校に着目し、学校の内部構造に埋め込まれたジェンダー・バイアスの作動様式を解明することを課題とした。

第1章では、欧米と日本の「ジェンダーと教育」研究を検討した。その結果、学校内部に埋め込まれたジェンダー・バイアスが生徒の内面にどのように作用し、生徒がそれに対していかに抵抗や葛藤を経て自身のアイデンティティを再構築していくのかという「個人内プロセス」については、十分に解明されていないという先行研究の課題を論じた。それをもとに、本稿の課題設定と独自性を説明した。本稿では、デュボイスの「二重意識」概念とポスト構造主義フェミニズムを援用し、生徒を単なる「構造に規定される客体」でも「完全に自律的な主体」でもない、権力に包摂されつつもその間隙で交渉を行う両義的な存在として捉える分析枠組みを設定した。

第2章では、本稿の存在論・認識論的立場や調査概要、および分析方法について記述し

た。本稿は、存在論的構築主義の立場に立脚し、解釈主義の認識論のパラダイムのなかで分析し、批判的実在論の考え方を部分的に取り入れ、いわゆる「認識論的多元主義」をもとに議論を展開する。事象の客観的実在そのものよりも、当事者が経験に付与する主観的な意味づけを重視した。調査対象として、ジェンダーに関心を持つ大学生4名を選定し、半構造化インタビューを実施した。また、質的データの分析手法である SCAT を用いる理由と意義を説明した。

第3章および第4章では、SCATによる分析結果と考察を論じた。分析の結果、ジェンダー・バイアスは、高校生活の日常場面(制服規定、進路指導、教員構成等)において、多様な形態で存在している。また、生徒文化におけるホモソーシャルな関係性や異性愛規範も、既存のジェンダー秩序の維持に加担することが示された。しかし、生徒たちはこれらを一方的に受容していたわけではなく、違和感や抵抗から葛藤を抱え、自らのアイデンティティを再構築することが可能であることを示唆した。

終章では、これまでの議論を総括し、知見と今後の課題を提示した。調査協力者らは他者のまなざしのもとでジェンダー・バイアスを内面化する「二重意識」に葛藤しながらも、多様なストラテジーを用いて抵抗や交渉を行ってきた。それにより、生徒が構造的制約のなかで行為主体性を行使し、自分のアイデンティティを再構築し、ジェンダー不平等の解消に向けた「変革の主体」となりうる可能性を示した。また、進路選択におけるジェンダー・バイアスの影響には「抑制」と「触発」という二律背反的な作用がみられた。家族や学校からのジェンダー規範が進路を制約する「冷却装置」として働くことがある一方で、抑圧された経験が逆説的に批判的思考を触発し、ジェンダー学への関心や自律的なキャリア形成への動機となる契機とも考えられる。さらに、「男性」「女性」という性カテゴリー内部には社会的亀裂が存在し、その経験が一樣ではないことも明らかとなった。

今後の課題としては、調査対象の属性のさらなる多様化、高校でのジェンダー・バイアス経験が進路選択後の人生に及ぼす影響の検討、さらには学校外の相互作用場面でのジェンダー・バイアス経験の分析が挙げられる。本稿の議論により、ジェンダー公正な教育環境を構築するためには、単に制度を変えるだけでなく、教員自身が自分自身のバイアスを省察し、生徒とジェンダーについて語り合える対話的な関係性を築くことが求められると結論づけた。